

2020 年コロナ禍と共に迎えた十年目

村本邦子（立命館大学）

2022 年 2 月 19 日、11 年に及んだプロジェクトを締めるシンポジウム「被災と復興の証人～11 年の足跡とこれから」を ZOOM で開催した。

第一部では、5 チーム 17 名からなる今年度の院生メンバーによるプロジェクト報告「11 年目の証人たち」と、現地関係者 4 名による「証人を受け入れて」、第二部では、プロジェクトを率いてきた教員、私を含む 5 名による「証人になるとはいかなることだったか」に続いて、過去にプロジェクトに関わってくれた教員・院生 10 名による「フォトボイス」、第三部は、現地関係者や修了生 6 名による「明日に繋ぐ～それぞれの継承」と、さまざまな立場にある関係者多くの人々が少しずつ声を発し、フロアからの声も含め、多様な声が響き渡るようなシンポジウムとなった。

そのうえ、院生が過去の写真をフォトムービーにしたものを作成してくれ、前半・後半と休憩中に流した。フォトボイスと合わせ、11 年のつながりが見え、長い年月の積み重ねを実感し、感慨深いものがあった。ZOOM ゆえのハプニングや不足もあったが、それでも、プロジェクトを締めるにあたって、時間空間を超えてこれだけ多くの人々の声を共に聴くことができたことは本当によかったと思っている。

プロジェクトはこれでいったん締めくくることが、福島を中心に今後もささやかな活動を継続していくことを宣言した。コロナ禍のなかで迎えた 10 年目、11 年目だったが、プロジェクトを閉じた途端、今度はロシアのウクライナ侵攻である。災厄は尽きない。せめて過去に学び、賢明に生きていきたいものだ。



時間までお待ちください

2020 年 1 月 コロナ禍の始まり

第五福竜丸展示館

2020 年 3 月、コロナ禍の中、オーストラリアから帰国した後、3 月 10 日、11 日と予定していた東京出張を決行した。大きな目的だった FoE Japan の「国際シンポジウム 3・11 から 9 年どう伝える？ 原発事故のこと」は中止となり、登壇予定者のメッセージや資料は HP に掲載された。もうひとつの目的は、国書刊行会に編集者を訪ね、東北の証人十年をまとめる本の相談をすることだった。話は順調に運び、古くからの友人を訪ね、翌日は、別の友人とともに夢の島にある第五福竜丸展示館へ行った。

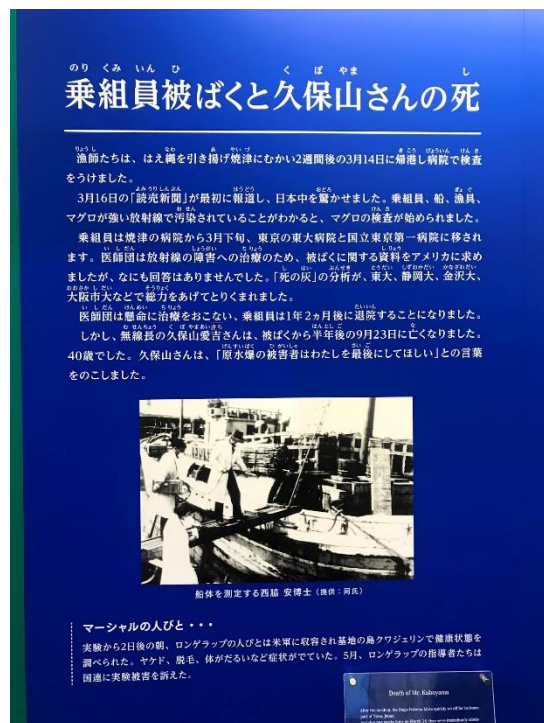
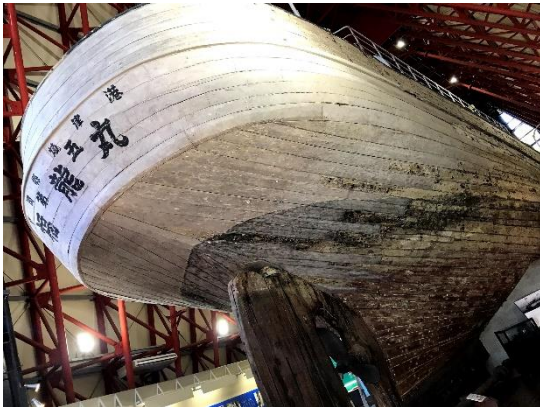
第五福竜丸は和歌山県で建造され、初めはカツオ漁船として活躍し、後にマグロ漁船に改造され遠洋漁業に出ていた。1954 年 3 月 1 日、アメリカ軍がマーシャル諸島ビキニ環礁で水爆実験を行い、第五福竜丸は放射性降下物で被爆した。乗組員たちは放射線による症状を呈し、無線長だった久保山愛吉は「原水爆の犠牲者は私を最後にしてほしい」という言葉を残し、半年後に亡くなっている。

被爆後、第五福竜丸は、練習船に改造されて東京水産大学で使われていたが、1967 年に廃船となった。船体はスクラップ業者などを経て夢の島に捨てられたが、地元江東区民から保存の声が上がり、全国で保存のための募金や署名活動が行われた。1973 年、船体の保存管理を目的として財団法人第五福竜丸保存平和協会が設立され、1976 年、東京都が原水爆による惨事が二度と引き起こされること

のないようにと展示館が建築された。

館内には、中央に大きな第五福竜丸の船体が配置され、それを取り囲むように、水爆実験被災の被害、乗組員の病





状、マグロ騒動、放射能雨、原水爆反対運動、太平洋の核汚染状況、日米政府による事件の決着、マーシャル諸島の核被害、世界の核実験被害、核実験・核開発年表が展示され、「死の灰」の実物や乗組員が使っていた日用品、入院中の乗組員に宛てられた手紙、ガイガーカウンター、集められた原水爆反対署名などの資料が並べられている。展示館前広場には久保山愛吉記念碑、福竜丸のエンジン、マグロ塚石碑がある。

ネット上では、東京オリンピックに向けて展示館が閉館すると言われていたが、確認してみるとそれは事実ではなく、夢の島の工事期間閉館するということだった。福島に関する展示はなかったが、充実した展示と誠実な学芸員が印象に残った。



2020 年 4 月初めての緊急事態宣言

2020 年 3 月 13 日に成立した新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づき、4 月 7 日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の 7 都府県に緊急事態宣言が出た。前日から慌ただしく連絡が飛び交い、7 日、朱雀で職員研修をした後、1 日繰り上げて教授会が開催され、授業もなくなることになった。4 月 16 日、対象は全国に拡大され、13 の都道府県が「特定警戒都道府県」と位置づけられた。むつから今年度の開催はどうだろうかという打診があり、様子を見る他ない。

立命館大学は全キャンパス入構禁止、授業もすべて休講となった。外出自粛で、買い物と散歩以外、自宅から出れなくなり、私は人生稀にみる暇人となった。考えてみれば、私の人生は不要不急のものばかりだ。個人的には不要不急こそ人生だと思っている。もともと“living with virus”を主義としているが、今回ばかりは、自分は元氣でも無症状者としてリスクの高い人に感染させるかもしれないのがネックである。

私は土地に縛りつけられ、大阪では 4 月 7 日から 5 月 21 日まで続いた緊急事態宣言下、30 数年暮らしてきた大阪の町を毎日歩き回り、淀川・大川沿いに多くの災害記念碑、慰霊碑、地藏、観音、神社等を発見し、自らの足元にもあった大阪の「土地の力」に気づくことになった。東北の「土地の力」にずっと感銘を受けてきたが、当然と言えば当然、歴史ある大阪にも「土地の力」がある。遠い東北を介して、ようやく足元にあるものに気づくなんて、青い鳥みたいだ。



大阪「土地の力」

天神橋筋商店街と大阪天満宮

私が勤める女性ライフサイクル研究所は、天神橋商店街にある。天神橋1丁目から6丁目まで南北2.6キロ、600店舗が軒を連ねる日本一長いアーケード商店街である。天満宮の門前町として発展し、大阪三大市場のひとつ天満青物市場も近くにあったことから、江戸時代から庶民の盛り場として大阪きっての賑わいを見せた。

日曜の午後、天神橋筋商店街の様子を見がてら歩いていくと、遅しく商売を続ける人々、会話と買い物を楽しむ人々がいることに驚かされた。店は閉まっていますが、その前行商が来て並んでいるのだ。向かいの店の脇には、神輿とともに大阪天満宮の「コロナウィルス退散祈願」の大きなお札が祀られていた。不謹慎かもしれないが、思わず笑ってしまう。



4月20日の毎日放送では、梅田の人出はマイナス86.9%であるのに対し、2キロ離れた天神橋商店街は人が多いと報じられ、通行人は「思ったより多いなと思いました。食べ物が無くなったから、ちょっと買いに行こうかなと思って」「今日はどうしても散髪に行きたかったので出てきましたけど、買い物終わったらすぐに帰ります。極力今まで外に出ないようにしていたんですけど、ずっとそういったわけにもいかないのですね」と言っていた。

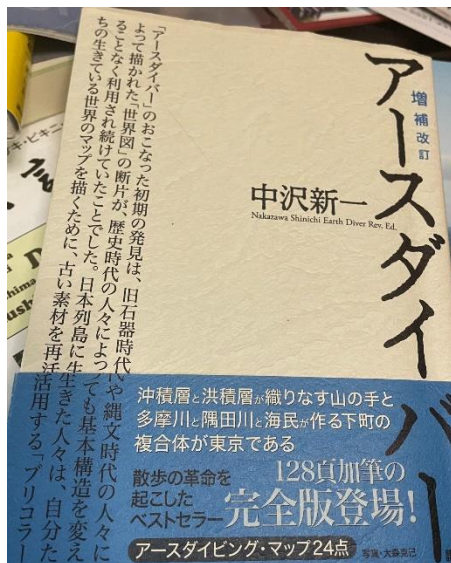
それにしても、あの大きなお札。考えてみると、たしかに天神祭りは疫病退散祈願が由来だったはず。650年（奈良時代）、孝徳天皇が大將軍社を祀る。949年（平安時代）、大將軍社の前に一夜にして七本の松が生え、夜毎にその梢を光らせたところから、村上天皇が社を建て、菅原道真を祀った。天神信仰は、951年に天変地異や疫病退散の祈願で始まり、夏枯れを払拭し、罪穢れを払う祭りだったそうだ。2020年の天神祭は、大阪天満宮の神事諸祭儀である宵宮祭、鉾流神事、行宮天神祭、本宮祭は神職のみによって斎行し、天神祭渡御行事保存協賛会が主催する陸渡御、船渡御、奉納花火を含む神賑諸行事を取り止め、本宮祭をインターネットでライブ配信することになったようだ。

大阪天満宮は、江戸時代の記録に残るだけで7度の火災に遭い、現在の本殿は、大塩平八郎の乱による1837年の大火で全焼後、1843年に再建されたものだそうだ。大阪市内を歩き回ると、大火の記念碑や地蔵があり、「地震・雷・火事・おやじ」と言われたように、火事が大きな災害だったことをあらためて知る。



アースダイバーと「土地の力」

映画『天気の子』のパフレットで中沢新一さんの「アースダイバー」という言葉を知り、東北で気づいてきた「土地の力」を考えるヒントになるのではないかと思っていたが、ずっとそのままになっていた。ふと思い出して、『増補版アースダイバー』（講談社、2019）、『大阪アースダイバー』（講談社、2012）を注文し、読んでみた。これが何ともおもしろい。アースダイバーとは何か、どこを読んでも明確な定義は見つからないが、その着想は、アメリカ先住民であるアルゴンキンの神話にあるらしい。



初めの世界には陸地がなく、地上は一面の水に覆われていた。そこで勇敢な動物たちが次々と水に潜って陸地をつくる材料を探してくる困難な任務に挑んだ。ビーバーやカモメをはじめ、みんなが挑戦しては失敗したが、最後にカイツブリが勢いよく水に潜っていった。水はとても深く苦しかっ

たが、カイツブリはやっとの思いで水底にたどり着き、ひと握りの泥をつかんで、一気に浮上した。こうして私たちの住む陸地が作られた。

一神教の神様が頭のなかでプログラミングしてスマートに宇宙を創造したのに対し、アメリカ先住民や環太平洋圏の人々は、神様も動物も、みんな自分の手を汚し、体中ずぶぬれになってようやく世界を創り上げたと考える。泥がぐにゅぐにゅして、ちっとも形が定まらないように、人間の心も同じようなつくりをしている。これを無意識と呼ぶ。思考と夢見がひとつに混ざり合って心をつくり、その心が集まって社会を作っている。そんな得体のしれないところを持っている私たちの社会は、アースダイバー型の特徴をもっているという。

アースダイバー型の社会では、夢と現実が自由に行き来できるような回路がいたるところにあり、時間の系列を無視して、遠い過去と現代が同じ空間に一緒に放置されている。地質学の研究にも依拠すると、地層には、堅い土でできた大地である洪積層と、川や海が運んできた砂が堆積してできた一段低い低地である沖積層という砂地がある。

そうやって東京を歩くと、水辺に突き出した岬や半島状の突起部に神社や寺院がある。縄文人は岬のような地形に強い霊性を感じており、記憶が失われた後も、そういう場所は開発の波を受けず時間の進行の遅い「無の場所」としてとどまる。洪積層台地が水辺に突き出した岬にはたいてい古墳が作られ、後にお寺や広い墓地ができたが、そのような土地を買い占めた大資本によって都会有数のホテルが建てられたりも

している。こうして、アースダイバー地図をもって歩くと、東京という都市が轟かせている「大地の歌」が聞こえてくる。

これはまさに、私が言わんとしていた「土地の力」ではないか。中沢さんも、一ヶ所だけ「土地の力」という言葉を使っていた。

「英語はアメリカ大陸に移植されてから、最初の入植者たちを取り囲むニューヨーク州の近辺にいたアルゴンキン諸族の言葉の影響を受け、アメリカ英語に変化していった。これが土地の力というものである。」（『増補版アースダイバー』29頁）。

つまり、地形や自然環境と人間の文化が交錯するところに「土地の力」が生まれるのである。

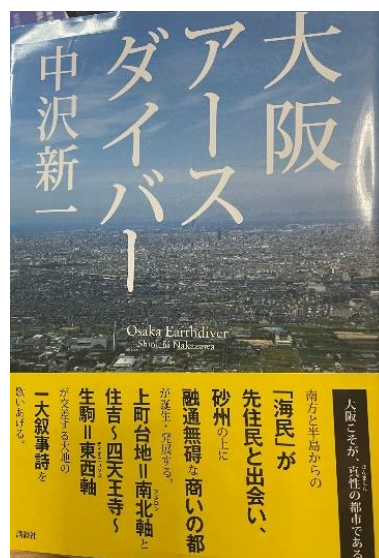
大阪アースダイバー

さて、こうなってくると大阪アースダイバーである。中沢新一さんの解説を紹介する。

東京の中心部は堅い洪積層の上に作られているのに対して、大阪の中心には堅固な土台がほとんどない。生駒山の裾野から広がる大阪平野は、このあたりが開け出した二千年前には大きな河内湖の底にあった。さらに遡って五千年以上前には、河内湖は海への広い開口を持つ巨大な潟で、縄文人が岸边近くにムラを作って住んでいた。そこは生駒山の自然と河内潟のもたらす幸に恵まれた豊かな土地だったが、人が住む事のできる土地は限られていた。やがて、淀川と大和川がこのような土地を肥沃な平野に

作りかえていった。今日の大阪の中心部をなす土地の大部分は、水中から生成し、東京のような大地ではなく、くらげのような柔らかいからだつきをした無定形な土砂の上に都市を生み、発展を遂げたのである。

大阪の街並みは中心部に限って言えば、整然と南北（筋）と東西（通り）に走っている。このふたつの軸線は、近世の都市計画によって決定されたのではなく、アースダイバー的な古代的理由によって決められたのではないか。古墳時代、現在の平野部の大部分は河内湖で、南北に延びる上町台地と北の砂洲によって大阪湾と隔てられていた。大阪の中心部の街並みの骨格をなす南北－東西のふたつの軸を決めたものは、上町台地と河内湖がつくるプロト大阪（原大阪）の地形である。大化の改新の後、孝徳天皇は上町大地の突端に近い高台に難波宮を建設した。中央の朱雀大路はまっすぐ南に延び難波大道に続いていた。この道は上町大地の上を北から南にまっすぐに伸びていた。これを「アポロン軸」と呼ぶ。それは威力に満ちた王の生命力が力強く放射されている様子を眼に見える形で表している。



そこに何本かの東西に向かう道が作られ、もっとも重要なのが大津道である。東西の軸線は実際の道路ではっきりと目に見える南北軸と違って、上町大地のどこからでも生駒山に向かった時に感じる磁力のような力である。国家よりはるか昔から生き続けている人類の生と死の円環の思想はディオニュソスと呼ぶ。南北軸は権力がつくる現実世界を、東西軸は想像力を巻き込んだ生死円環をなす野生の思考を据えている。東西軸が大阪をユニークな都市にした。

私はますます精力的に大阪の街を歩き回り、あちこちの旧跡や記念碑、神社仏閣を訪ねたり、ドライブして周辺の古墳群なども見て回った。



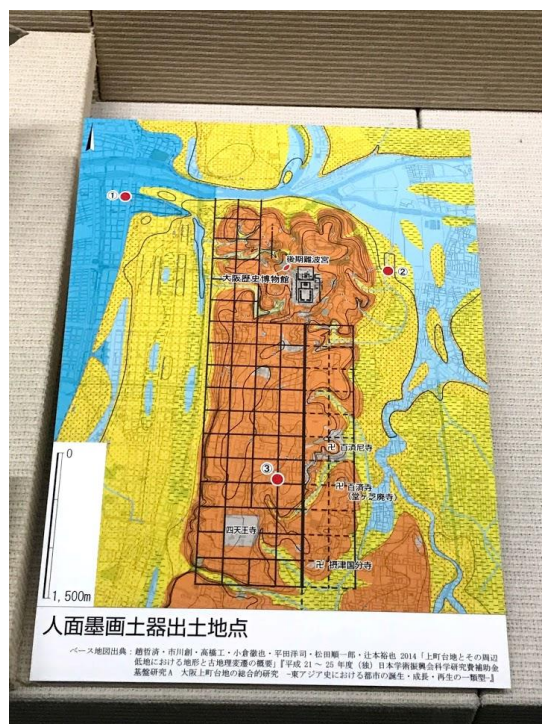
大阪歴史博物館～疫病退散の祈り

大阪歴史博物館で「疫病退散の祈り」展をやっているという記事を見かけ、9月にはそこへも足を運んだ。エレベーターで10階に上がると、原寸大に復元した難波宮の大極殿で、直径70センチあるという朱色の柱が並び、官人たちの等身大の人形が並んでいる。広いガラスの向こうには難波宮跡が見下ろせるようになっている。また、時間が来ると、そこにスクリーンが降り、宮廷の儀式の様子が映し出されるしくみになっていた。当時の地図と歴史上の地形変化も示されており、まさに大阪アースダイバーの気分だった。



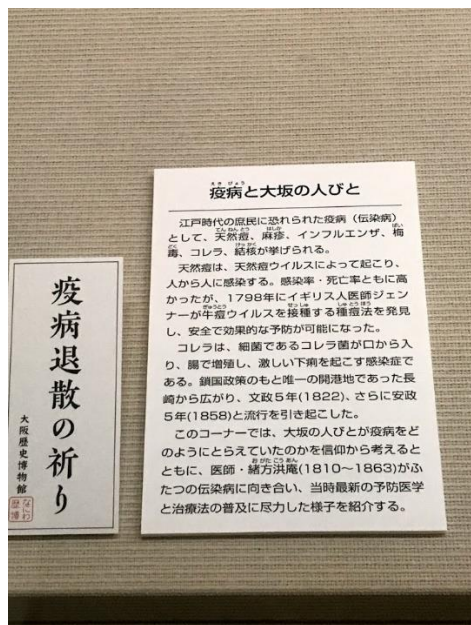


「疫病退散の祈り」展は、常設展の関連の展示にマークと解説がついているという形だった。10階では、関連展示として「人面墨画土器」があった。古代の都城や官衙（かんが）周辺の川や溝で見つかる祭祀用の土器で、外面に複数の人面が描かれ、この顔は疫神だという説がある。当時の人々は病気の原因を疫神やケガレに求め、土器を川や溝に流すことで病気を祓おうとしたと考えられている。奈良時代には疫病が流行し、人口の多い都市部に大きな被害をもたらした。ここにある土器は奈良時代の難波京の周辺部と中心で見つかったもので、1,300年前の人々の病気への恐れを示す資料であるという。

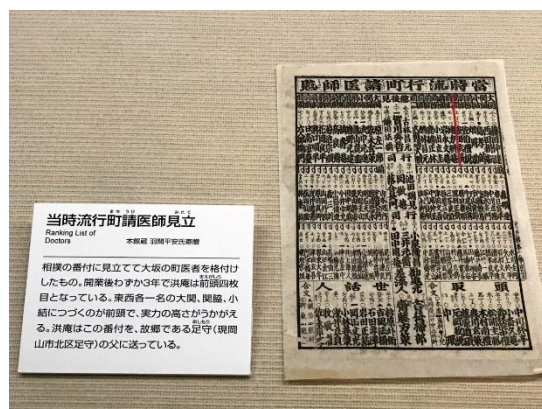
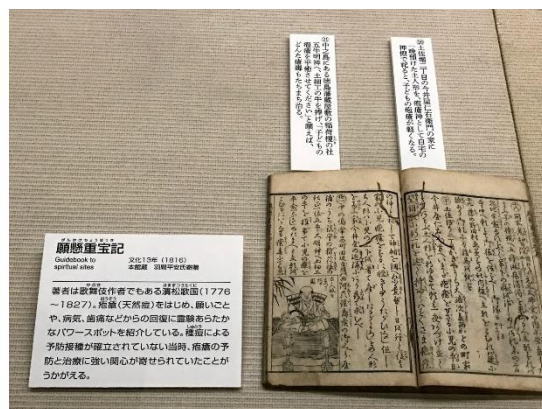


9階「大坂の幕末・維新」のコーナーには「疫病と民間信仰」が展示され、「疫病と大坂の人びと」の解説があった。江戸時代の庶民に恐れられた疫病として、天然痘、麻疹、インフルエンザ、梅毒、コレラ、結核があったこと、天然痘は1798年にイギリス人医師ジェンナーが種痘法を発見したことで予防できるようになったこと、コレラは、鎖国政策のもと唯一の開港地であった長崎から広がり、1822年（文政5年）と1858年（安政5年）に流行を

引き起こした。そして、ここでは、緒方洪庵（1810-1863）がこれらふたつの伝染病に向き合い、当時最新の予防医学と治療法の普及に尽力した様子が紹介されていた。



幕末、堺に近接する湊村瘡神宮（かさかみぐう）のお札の展示があった。このお札には中国の神である神農が描かれ、人身でありながら牛首でツノがあり、国内でも医学・薬学の神として信仰を集めたという。面白いものとしては、歌舞伎作者である濱松歌国（1776-1827）による『願懸重宝記』という綴本で、疱瘡をはじめ、願い事や病気などの回復に霊験あらたかなパワースポットを紹介したものや、相撲の番付に見立てて大坂の町医者（まちいしや）の番付をした「当時流行町請医師見立て」があった。緒方洪庵は、開業わずか3年で、前頭四枚目となっていた。洪庵がコレラ大流行に対し、新たな治療法を医者仲間に知らせるために蘭書を訳した『虎狼痢治準』や緒方洪庵の除痘館も展示されていた。



7階の「都市の民間信仰」のコーナーには、「郷土玩具による疫病除けの祈り」の展示があり、郷土玩具が集められていた。天然痘は疱瘡神という疫病神が引き起こし、疱瘡神は赤色を好む、もしくは嫌うため、子どもに赤物玩具を与えることで疱瘡神を誘引、もしくは威嚇して病魔を遠ざけようとしたという。穢れやタブーは避けると同時に引き寄せるという矛盾したふたつの方向性を持つ。トラウマが再体験とともに麻痺・回避の反応を呼び起こすことと関係するのだろうか。大坂張子として、赤い達磨（猩々）が並び、続いて虎の張子も並んでいた。

「虎狼痢」は「コレラ」の漢字として使われていたようだ。虎や狼のように強く怖いものと捉えられていたのだろう。朝鮮では虎が絶対的な力の象徴で、悪を追い払う守り神とされていたことから虎を描いた虎図もある。それから、「大坂張子・神農の虎」。1822年（文政5年）、大阪でコレラが流行した際に神農祭りが盛んとなり、「虎頭殺鬼雄黄圓」という疫病除けの丸薬を神虎とともに配ったことに由来して、大阪市にある少彦名神社の神農祭では張子の「神虎」が今も配られるという。



そして、ギフトショップで面白い本を見つけた。『大阪の神さん仏さん』（釈徹宗・高島幸次、2014、140B）だ。この本によれば、篤い信仰心とクールな合理主義をあ

わせ持った体質が大阪人のプロトタイプであり、この基質は、大阪の地が育んだコンプレックス（複合心性）に起因する。大阪は四方八方から流入してくるものが交差する場であり、物心両面さまざまなものが集積することで生成してきた。大阪人は、一人が複数の共同体に所属するメンタリティを大切にして、したたかでタフである。異質なものが二重三重に工作する精神性を持っているのだという。なるほど、疫病に対して、大阪人たちは、民間信仰のような呪いと緒方洪庵に代表されるような科学の二重性でもって対応していたのだ。ますます興味が湧いてきた。



大阪くらしの今昔館

～江戸時代の疫病退散

10月、天神橋筋商店街のスタート地点に位置する大阪市立すまいのミュージアムの中にある「大阪くらしの今昔館」で「江戸時代の疫病退散」をやっていると知り、こちらも足を運んでみた。

天災や流行り病など、目に見えない災難に直面したとき、江戸時代の人々は、その原因を怨霊の祟りと考え、怨霊や神の姿を絵や人形に表し、身の回りの置くことで疫病と戦い、命をつなげてきた。大阪の天神祭りや京都の祇園祭は、疫病を鎮めるための祭礼だったという説明から始まり、疫病退散を願って、入口に魔除札を貼り、店の間や床の間に造り物や掛軸を飾った様子を再現してあった。

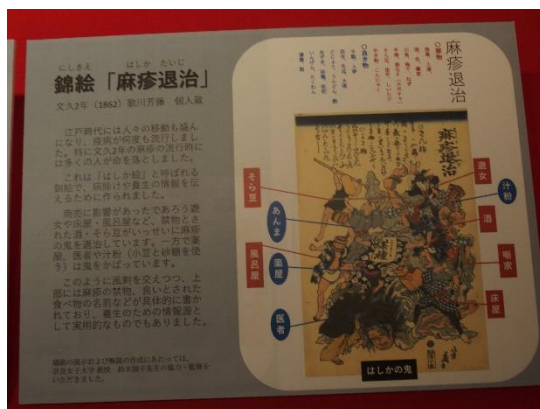
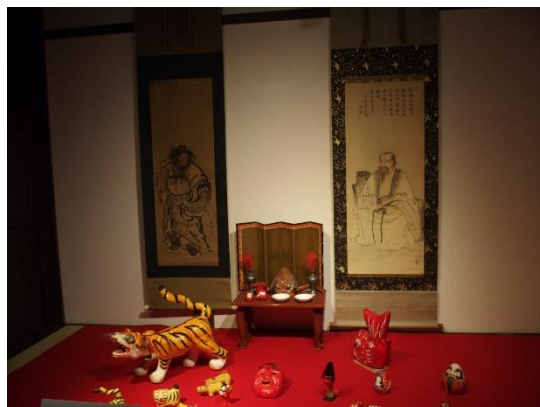
鍾馗（しょうき）は中国から疫病をはらう神として伝わり、五月の端午の節句には、疱瘡除けのため、幟に鍾馗の絵を描いて戸外にたてたり、五月人形として座敷に飾ったりした。神農は既述したように、中国医薬の祖である。この2つの掛軸は江戸時代の大坂で制作されたものという。

コロナ禍において、江戸時代、熊本に表れた妖怪アマビエにちなんだアマビエの札がネット上から生まれ、今やお寺や神社でさえ配られるようになったことは面白いと思っていたが、ここでは、平安時代の比叡山の高僧「元三大師（がんざんだいし）」が鬼の姿になって疫病を退散したという言い伝えから、江戸時代の人々が家の入口に貼ったという「元三大師降魔札」のことを知った。

映像では、麻疹絵と言われる錦絵で魔除けや養生を伝えていたこと、麻疹の流行で影響を受けた物や人が力を合わせて麻疹の鬼を退治している錦絵を紹介していた。そのなかには、酒やそら豆とともに遊女や噺屋が含まれている。薬屋、医者、汁屋は逆に鬼をかばっている。風刺を交えつつ、麻疹の禁物と良いものを知らせていた。

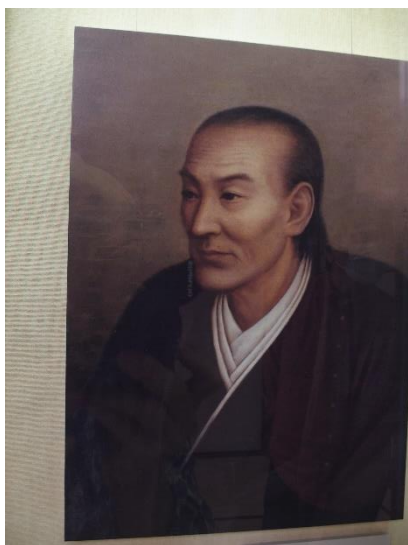
そして、ここでも、赤物や虎などの郷土玩具が集められていた。これらは日本各地にあったようで、会津の「赤べこ」や三春の「めで鯛」、甲州の「信玄だるま」、土佐の「起き上がり」など郷土玩具に赤が多いのは、子どもを疫病から守る意味があったとする。虎の説明もあった。コレラは下痢など激しい症状が出、一日千里を走るとされる虎のイメージと重なり、虎の文字を使って、「虎狼痢」「虎烈刺」「虎列拉」「虎列刺」などと記されたのだそうだ。

また、大阪の大火、地震、津波などの災害や大阪大空襲の展示もあった。本当に昔の人たちは多くの災厄を乗り越えてきたのだと、あらためて溜息が出る。



緒方洪庵、適塾

さらに興味を持った私は、大阪市中央区北浜にある適塾・緒方洪庵旧宅に行ってみることにした。緒方洪庵は17歳の時に中天遊の私塾「思々斎塾」に入門、4年間、蘭学・医学を学んだ後、長崎へ行き、出島のオランダ人医師ニーマンに医学を学ぶ。1838年大阪で開業し、同時に適塾を始めた。1849年に日本にもたらされて間もない牛痘種痘法を大坂から西日本各地に広め、1858年のコレラ大流行に際して、コレラ治療法が記された蘭書をいち早く翻訳し、『虎狼痢治準』としてまとめ出版した。



ここで見た展示で面白かったのは、中天遊による大黒天像である。中天遊（1783-1835）は大坂の医師・蘭学者で、洪庵は17歳の時から4年間中天遊に学んだ。大黒天を信仰していたという。信仰と科学の二重性がここにも見えるのも興味深い。主な門下生についての展示もあったが、適塾には全国各地から人が集まり、福沢諭吉大村益次郎ほかはじめ24年で千年を超える塾生がここで学んだという。24年というのは、1862年、洪庵は、幕府の西洋医学所頭取として出仕の要請を受け、江戸に出仕したからである。

それから『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』（緒方洪庵記念財団・除痘館記資料室編、思文閣、2015）と手塚治虫の漫画『陽だまりの樹〜除痘館』を買い求めた。当時、人々がいかに種痘を怖れ、洪庵らが苦勞して人々を啓蒙していったかがわかる。

その後、適塾・緒方洪庵旧宅から一筋南にある除痘館跡に建つ緒方ビル内にある一般財団法人緒方洪庵記念財団「除痘館記念資料室」を訪れた。手塚治虫の曾祖父にあたる手塚良庵（良仙）は適塾に学び、後に江戸に種痘所を設立するのに尽力した蘭方医であった。手塚治虫はそのことを『陽だまりの樹』に描き残していたのである。いろんな人々がつながっているものだ。当時の私塾の力を改めて思う。

ここで面白かったのは、ビルの入り口にある「除痘館跡」の記念碑とともに掲げられている「牛痘児」の錦絵だった。牛痘種痘をすれば牛になる、牛の角が生えてくる、赤い色が天然痘を避ける、疱瘡の神は住吉大社を祀るべし、牛痘種痘は詭術で危言妄説、万里を隔てた野蛮な国の獣臭い苗を求めて、日本の貴人に植えるとは実に嘆かわしい・・・など様々な誹謗中傷があり、医者たちは苦勞した。『陽だまりの樹』にもそんな様子が描かれている。





上述したように、江戸中期から後期にかけて、家庭医学書を始め、はしか・疱瘡・コレラなど疫病の養生法、治療法を解説した錦絵が数多く出されていた。江戸の小児科医だった桑田立斎が、人々が錦絵を好むことから、これを啓蒙に使うことを思い付き、牛痘児の版画を刷って配った。白い馬に乗った牛痘児が疱瘡神をやっつけているという図である。これが全国各地で翻刻された。大坂発信のものではないが、科学と呪術を組み合わせたものとして興味深い。

なお、1869（明治2）年、洪庵の息子惟準を院長とした大阪仮病院と、オランダ人医師ボードウィンを迎えて惟準はじめ適塾の元塾生らを中心として大阪医学校が設立され、さまざまな変遷を経て、現在の大阪大学医学部へと続いている。

十年目のプロジェクト

大学では、手探りで ZOOM が使われるようになり、連休明けからはオンライン授業が始まった。少しずつ慣れてくると、案外便利なツールであることもわかってきた。司法臨床の集中講義ではロールプレイ演習さえ ZOOM でやった。共に身を置き空気を共有しながら行うものには代えがたいものはあるけれど、工夫を重ねながらやっていると、対面で行うのと違った利点があることもわかってきた。

それで、プロジェクトもリモートでやることをやってみようと思った。危機への柔軟な適応をレジリエンスという。ないものを嘆くのではなく、あるものを最大限に活かしてやることをやるというのがプロジェクトで学んできたことではなかったか。大阪の豊かな水、植物、鳥、豊かな自然に触れ、コロナ禍において、こんなに地元のことを学ぶことができるのもプロジェクトのお陰である。

とは言え、最終年をオンラインで終えるのは残念すぎるので、今年はオンラインでつなぎ、最終年を1年延期して来年度に持ち越すことにした。

つづく